おとうと (2)

（小学五年生の「少年」は、「海に行きたい」と言う弟のアツシを自転車の後ろに乗せ、海が見える商工会館の屋上を目指しています。アツシは明日、目の手術を受けるため入院する予定です。）

手術が成功すれば、視力はだいぶ上がる。いまほど分厚いメガネをかけずにすむし、ものがゆがんで見えるのも治る。でも、もしも失敗してしまうと――父も母も、そのことはなにも話さない。だから、少年も訊けない。

「アッくん」①前を向いたまま、声をかけた。「なんで海に行きたいんだよ」

「なんとなく……」

「だって、おまえ、海なんかべつに好きじゃないだろ」

「でも……わかんないけど、なんとなく……」

「明日入院するから？」

少年の声は、かすかに震えた。アツシの返事がなかったので、ハンドルを強く握りしめた。胸がつっかえて、どきどきする。胸の中には、まだ訊きたいことが残っている。

目の手術をするから？　手術に失敗するかもしれないから？　もしも失敗したら目がどうなるのか、アッくん、知ってるの――？

道は上り坂になった。二人乗りで漕ぐのはもう無理だ。少年は②胸をつっかえさせたまま、自転車から降りた。アツシも荷台から降りようとしたが、「いいよ、おまえは乗ってて」と振り向かずに言って、自転車を押していく。

（中略）

商工会館の建物が見えた。あと少し。少年は息を詰め、歯を食いしばって、自転車を押していく。汗が目に滲みる。拭き取りたくても、ハンドルを片手で支えるのは無理だ。目がチカチカして痛い。汗と涙がにじんだ目に映る風景は、揺れながらゆがんでいた。

日曜日の商工会館は玄関に鍵が掛かっていた。少年はあきらめきれずに玄関のガラスドアを押したり引いたりしたが、アツシは③さばさばした様子で「おにいちゃんと二人乗りしたから、面白かったから、もういいよ」と笑った。

「だめだよ、そんなの」

開いている出入り口がどこかにあるかもしれない。たまにはそういうことで「もしも」を使いたかった。

「勝手に入ったら怒られちゃうよ……」と逃げ腰のアツシの手を引いて建物の裏に回ると、非常階段があった。落ちないように柵のついた、らせん階段だった。

よし、と少年はうなずいた。方角も海のほうを向いている。いいぞ、と頬がゆるんだ。「もしも」が当たった。めったに当たらないから「もしも」なのだから、もう一つの「もしも」は、これでもうはずれる

――と、いい。

（重松清『小学五年生』文藝春秋　所収「おとうと」による）

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「前を向いたまま、声をかけた」とあるが、このときの「少年」の様子として最も適当なものを選びなさい。

ア 手術がうまくいくかどうかが不安で、悪い想像を振り払うために手術に関係のない話をしようと思っている。
イ これまで海が好きでもなかったアツシが海に行きたいというので、その真意がわからず頭を悩ませている。
ウ アツシが海に行きたいというのは、手術に失敗するかもしれないと思ってのことではないかと気にかかっている。

〔　　〕

(2) ――線②「胸をつっかえさせたまま」とあるが、これについて正しく述べたものを選びなさい。

ア 道が上り坂になり、これ以上進むのは難しいのではないかという不安に襲われている。
イ アツシが、手術が失敗したときのことを考えているのではないかと気になり、胸が苦しくなっている。
ウ 少年の問いかけにアツシが答えなかったことで、アツシが不満を抱いていることを確信している。

〔　　〕

(3) ――線③「さばさばした様子」とあるが、「さばさば」とはどういう意味か。適当なものを選びなさい。

ア やりようがなく、無念な様子。
イ 退屈し、興味を失っている様子。
ウ 何かをあきらめきれず、心残りな様子。
エ 執着がなく、ものごとにこだわらない様子。

〔　　〕